朝夷巡島記第八編 一

庫
つ
40
95
2
10
40
架號
番號
冊數
へ13
3093
36

朝夷巡島記

浪華

松亭金水著
葛飾為齋画

第八編五卷

文金堂
文榮堂

九年
七月二三日

朝夷巡島記全傳第八編叙

和漢新奇之譚。從古昔至于今。所著若于卷。雖然佳作稀焉。這朝夷巡島記者。曲亭翁戲墨雜興。燈下之眠未覺。頓談無根之夢。嗟夢哉夢哉。盧生一夢五十年。足示人生一期矣。南帝一夢南木者。以足清天下矣。貴賤尊卑貧富及。

門 へ13
號 3093
卷 36

哀歡苦樂俱夢也覺而一堆之土饅頭孰不逭於終煙乎生前富貴食前方丈身纏綾羅錦繡却罹陰獄苦趣焉生前貧賤食藜藿身纏褸褐絺綌却生昇平樂國矣無他善與不善而已矣是以小說者流克考其夢之味諭勸懲之意者以謂佳作可也今及綴於此編雖頗基其意啻是不免紙古人之糟粕之譏云爾

昔安政四歲次丁巳仲冬發行

松亭迂叟題并書

朝夷巡島記第八編全五冊巻中總摽目

巻壹　續集第十一　英雄議を鎌倉ふ帰る
　　同　第十二　義邦石戸ふ孩児を設く
　　同氣相求む奸計の密話
　　理を説狩を止む婦人の實

巻貳　續集第十三　一頭の野猪確執を釀し
　　二歳の小狗隱川ふ漂ふ
　　幻術を現ぜ山神の祠
　　同　第十四　危難を救ふ夢菴法師
　　草菴の奇遇源家の族
　　續集第十五　道人無為の教へを説く

巻參　同　第十六　邯鄲るゝぬ草菴の夢語
　　石戸の旅寓家族の歎ち
　　主を索ね托ぶ隱川の上
　　奸計一ぶび就る石戸の郷士

巻四　續集第十七　黄金ふ溺る優婆塞ぶ浅智
　　同　第十八　急ふ迫ぶ佳人の嬾ひ
　　身を捐て節烈を全うし佳人の情

巻五　續集第十九　残毒忽地報う家族ぶ最期
　　同　第二十　初て非と悟る懺悔物語
　　奸計再三到る程谷の驛

通計二十條總摽目畢

猿面大王
吉見冠者義邦
虎賁將軍
妖魔幻術
雄精奚若
勝善者
熊威魔王
狐妖神通

能信於南海之民廟食百世而不絶徒其必一日安於朝廷之上

右假賛韓退之之文而充義秀

○葛西清重

古今集 今さらにあふみ
なりいつはりも
世のなかをうらみわびぬる

○義邦の嫡男 翠麿

○三草太郎五昌之

○吉見冠者 義邦の室 筐嬢

かくしても
なほてもとりも
お
ま
神の名を
桂園一枝 景樹

○宮小四郎 弘義が 渾家 斧木

附言

○毎編姓氏畧目なり。今この編ハ新出の者。宮小四郎弘義ハ其次秋弘と弘義ゲ渾家斧木。修験修道院酔殘の他ハ。みな前編ハ出さるなれ。別ハ畧目を掲げ出さず

○此編ハ朝夷義秀。判五等ガ讎を討ち。巴の尼ハ再會あるを乞ル趣向なりしゴ。義邦の本傳多端あるとて。いまゴ其場ハ至ル竭さず。既ハ楮數限アあるバ。開ハまず後の篇ハ讓ル

○ハの編總て吉見冠者義邦の傳繁くして。義秀ガ事蹟稍寡かりけるバ。看官遺憾多かんを。第九編ハ至ルてハ。專ら朝夷の傳を挙ゲ。前後の猥雜作者の苦心宜ク察シ給ヘとなり

金水再識

朝夷巡島記全傳第八編巻之一

東都　松亭金水編次

續輯第十一

英雄議ヲて鎌倉ハ帰ル

義邦石戸ハ孩児を殺ク

案了前齣再説獣六郎ハ義秀ハうち對ひ主僕不慮ヲる危難ハあれと安泰ハして言葉と拜ヲるとの嬉しさよとうひて懐擦探り。岩神ヲる判五ガ状を把出して右ハ伏ハ吉田命ハ任せ。義邦ハ石戸の荘へ恙なく送ルしハ被迂ヲ古鈹ハこの年来人住ヲ部ハ壊ル檐傾ヲて。見ル入ル容ヲ事ヲて郷ハ住居ヲる。宮小四郎ハ家居も廣ク。鈹の修理を加ヲるハとハ思ハ居ヲ人とハ。ふつうて義邦ハ夫婦主従を祭ハ入り。日ヲるず番匠を促ヲて。まづその作ヲて始めヲる。然るハその果ると伏て安閑と居ヲ人ヲるハ夫より

越の岩神へ赴くと暇をこふ。吉見ぬの宜あへ江三二廣光も。こまやかに暇を述
遣はるべし。今二三日逗留せ。俱ふ彼処へ赴くべし。その帰らん比及ふ。修理も
全く承諾せべしとあるふりて逗留すれども。その明の日筐媛い産の気つきそ悩ま
る。廣光指ぬ。摽吉及び生き下僕も彼岩と物をまとこる雄士ゆえ。かる時ふい
物の要ふ立ちたるいと多り。こふ彼宮姓の渾家の爺木とらふるい年も四
十と三ッ四ッ話て。我あり気多女子ゆえ。その初めより媛と労り。伝実ふ
欲待る。媛もまた心と措き。爺のことと語らひて。彼ら意ふ任せそり。然れば産の
気のつれるとと弁一侍と去らず。分抱のんと考そその甲斐ふその夜安産と孫の
ごとき男児を産のこふ於て冠老いりのる。こる一月ふ欲ひ勇ましこれと喜ぶ
ものあり。彼爺木い老実ふのもまと昨今あへいまと訓漆の深ふふ。
かる時こそ廣光の渾家。浅良井の産家の渾家も嘆きのふ。よの

嘆いふも道理あり。一日も迷ふ若こあらしと。これ七夜の儀もえ果てそ廣
光弦共彼処と起行。急ぎ岩神ふ参り着きこの月来の恩と謝し如此この
ことを告げ。浅良井母子と別れ飯ふんとす。判五指ぬ尼ぬ舞ぬこのことを喜べてこち
欲び。蒲殿の子孫ふて吉見の刀称ぶ。逗田若君の
生まれそ。彼家再ひ栄えぬ。爺代の僧あり。筐媛のもん欲び。然ることを推て童
らるまと然いあれとも産ふ隔る。分副の女子多くて物毎ふ不自由ふこそ
在りけ。さまと急ぎ浅良井ふ。起行いさるべしと甲斐と考く世話しぬ。
己い判五殿へ出ぬと出ぬ。如此くこの功績あり。昵近の列ふ撰されひつ
義人光仲ぬの出ぬ矛の上のままそ。綜細やうふ治りしうん人と咲て或ひい欲ひ式と
嗟嘆せ。然ふ出ぬ返輪と傷りけ。とび然いて廣光浅良井ぬと。俱ふ出ぬ
語と急ぎ。三國街道ふて袂と別ち。下僕い武義壮と志して来りしふ荒川の

遠艮渕に宿り需めしその霄に箇様なのことありそ既にまとまる刻義の猟人
めに謁しる。夫より後の一件は尚に云ふもなくくこのひて判五う返翰となせば。
朝夷はあらうあけてその表書と熟視ひて秘る。余勢に獣六弟はんと
得そ主の敵とうち成る。當下義秀首と掻げ。れそ積善に餘慶あり積に
善に餘殃あり。こは上古聖の金言なそ。誰ともよく知ることなり。吾あい怪かなる
こなり。抑判五は温順にして仮初にも悪と做さぬ人の為に我を捨て一点ぐらも
惜まぬ。佛を作ず若と然く勇めて先祖を祀り親族と吊ふそ家頗富と
なるとも。必と謙まて慎れることなく。忠直の性なるを。近来落命うち続き絶に
一家の絶るに至るもわが世の業因を凡智と以て量ることなかれ。
獣六はまこそのことを聞て膝と進めて伺の故に若刀称さぬ。漢さまは稲向一家
死畢りて未ん春は媛と伴ひ又物ふそ孫舎へ立越んと宣へり。伺の条さること

のいべきと呼る面と熟視て。然しては理なり。我孫舎と豊年陸奥へ向ふ
途中。箇様ことあて一三箇ヶ今駆に逢て一件と生さり。その歌は如何に夫聖
堂なその絆の顛末具に語りて開いは你達ぶ累年と起汐せ。その夜のそのあそ
あしとぞ因て我今この所より。出羽に出れ中に入らんとするは岩井ぞき。尚宜によ
らべ當の敵魔五平とこんと退治さぐ。まこうぞ母と憑こうる巴の尼ぞ奥に古
汎んと依らの談あい掛まること。ぞて獣六大に後ふて返らぬ。あれとその城
今一夜早く来らべ江廣光あり不肖ぞ。下僕の加のあに不あきぶ眼ぞ西在
媛あらび判五ぬに禍あ〜せ。情〜きそ〜ぞ〜ぞ〜と流る眼ぞ〜ぞ〜き。
更に右左の刻ぞ。俄聞きそ猛八は勝と逃ぞ腰越姓ぞ。佐伯は岩井の
岩井。判五ぞ大人ぞ桑山。まこと田崖媛ぞ〜かの女児に産廿大人ぞ子ぞ〜
然ると賊に過ぎまこと心中さそと推量れ。在下不肖なることぞ。大人に

隨順のて初めて彼処へ旅き山賊の魔五平とやらんと拳んと掌の中にあり。大人ぞ這間の危難にあること二朝の事にて在下熟思維するに北条力強大人ぞ大功屢ありと忌み嫉み憎む。心を快うせんとまる計策にあ〜〜んとかの旅人ぞ持りてこの隱居の狀をそなへぬ別その狀書にあり。とて伴の狀とさし出にて人〜搦み火炙にそうち殺すべきこと云るの。朝夷義秀這い和殿の者に差いで時を内をもてとて喪をんと計ぎりの。然いに在下北條に曾て仇なるべく怨みもるれにいるるまでに初めて心を碧てるまと計るにやく言得がたしとて猛人小勝と礙とうちて大人に聰明人に旅え胸中の明らうるとと曇らぬ境に等しとても物陰りをれにあまで遠うて眼の及ばぬとあり。古人も脫に睫上の塵をうんぞとい言遺り在下もの遠所に在て更に宦遣に拘ぎるど却て事情を察するに精し。

思に北條刀称父子の奸謀をまさ一朝のことにあらず。故に智量衆人に超え後に己が隱謀の妨とるべく老を暗に黙くるの心あり。脫に多田の藏人ぬ。陸奥に大功あり〜も。奸計とるべ陷を罪ぬんと做しけるに其罪信偽と決せ難ぬ。大人が明智。忽地水源をうんぞさるを解き

るべく奸謀をうの泡とるべくるべんをきるべり。一件故幕府の時より舊功の老たと喪いんとする萠あまで遠にあべく大家に一族虞べく所従多し。

因て斃をい容易べ〜ず。故に枝葉と変る。そもべく舊功の者臣といへ謂三浦和田畠山安達土屋と拓し。その負いをうまで尤かの家に泡ふりのあり。然るにその世移り更りて害に害にぐるべ。敵と化と心と世べかの土肥先次郎が輩と大人に則和田の三男廷尉とうに大人とう人に為に敬業のまべ依こと物に假託てまづ枝葉に拓さんとす。

いまだしてさてその心の廉直のこと表にあらはれて縡を為さば始終その奸計に当(?)らざることを稀なるべし。と思ひて朝夷らも鷲郎和殿が議論究めて妙なるを感ずに這回かの奸計に当りて既に云云なり。偏に日ごろ人に思えし如く本街なる出立の。守護目代たる好(?)機のことを思ひ僻みて吾を疑ひ手捕にせんとて競ひ来より叛逆たると争ふて罪を倍のこと益なければ。白沢郷を出羽に入り。先それより越にあれ山岩升を訊ふれどもあらん。謀念の動静も知るべく。さあて彼諸へ帰らんとぞ。よふより其の所へ馬の鼻を向るがまことなるべし逸人たる吾に念(?)謀念人目ことまことを悪き多に訴へつ。その罪を解く術なければ。今に飯を甘ぬなるべけれども。人皆はその理ありてこの心よく冤に墜ん。その儀にとて和殿が明辨心得なり。と問ひかけまして猛八は左右を顧ていふやう。妄智慧者の心を忘れて。かく言すは烏滸なれども畢竟大人が心を思ふの赤心よりして

人の所倘なば余ぞは含すべからその事なり。周て必人随ふていんと扇を物に膝をすゝめ。今大人が宣ふ如く。これ下の岩升へ赴きて自ら日を延さば必ならずそのあひだに在下が思ふにはまてら悲に謀念へ向り。才工這田の急務とぞいはんかの按断の一事にこそ力を労さずして。一朝に民を皈服し。忽地静謐となすの條と言上てさて磐城の愛妾縁(?)にとらへるが如此この事によりて諍論となり。時直及び阿武隈たる此の心を辱るむるによりて。竟に双傷に及べるなり。ゆゑどもいづでが所業ぞの因縁なるを知らず。深き故もあり気なれば時並(?)にすまれ阿武隈はまだ二個は生てしかひたれど彼は多勢にこれは一個でまだ一人の厭大脱なく二個とも斬害しぬまでは乳明らむるの虚を失なへとに於て岩擔(?)の輩両個を搦め得て将て来ぬれども。その密事を知るや否や。さて當下の事にて狂(?)周て発揆せしにあらざることは渠等もよく知る所なり。と在りまするに云上

白澤越ふ
猛八得失を
説く

うしひで

獣六郎

あゝべ。執権とまで何とう計らへ。倘雑類といひみて。ひと拝領のごとす
ふ能ては。彼隠岐の狀とりて。元明とのゝ賞元善信二個のうち。所へ。
事故なく済みべ。今遅ゝるさば怠りと言解ふ不ゝらん。巴の尼は再ふ
ゆるゝと。亦その賊主魔五平と撃んとその後ふあるべ。但不日ふ賊と対。その
弊情と晴さん欲ゝ在下弓より彼処ふ立紙を大人ふ代りて賊と対べ。
大人いとまより一向ふ稼金人飯りゝ。理非明白ふ述けまゞ義秀熟ゝ思ふ足
下の公論究めて理あり。然ゝ是より稼金ふ帰らんつゝ。絨魔五平と撃
ゝ私の儀ふて遅くとも妨ゝ。足下も倶ふ稼金ふ帰ゝ。父及び兄弟ふも。対面と
做ゝ。と衆議決ゝその夜と明ゝ。彼髮城の郷民皆。志いさるゝとゝども。
稼金人帰ゝふ及びかく多人数と伴ふて。その安えも宜ゝ。異心あるゝど
疑ゝ。ふ。各ゝ好去のふと。所ふ従ゝて忘まゝ。他日志と約ゝ。

あゝ夫れゝの報いとゝ。但你們ふ憑むとゝ。此地へ来る途中ゝ。
養友と坊ゝと城戸四郎三草太郎五両個の従者と引き頒で武義のふ。遣
ゝ。彼処ふ障ゝて。ゝ。ゝ。此地へ到り著ゝ。程経ゝて。ゝ来ゝ。我ふ在
と知ゝ。ゝ。ゝ。進退と決ゝ。倘かの両人髮城へ来り。如此ゝ。ゝ。
行方と索ゝ。ふ稼金ゝ。敗れ。急ぎ両個も飯ゝ。と演説ゝ。
と憑ゝ。農民們ふ一容ふ。その美畏ゝ。但此処ゝ。ふ副ふ別
ゝと快ゝ。稼金ふ。ゝ。ゝ。ゝ。京所ふ。ゝ。ゝ。送り奉ゝ
と一容ふ。ゝ。ゝ。推注め。志いさるゝ。ゝ。ゝ。今ゝ。如く多人数と引俱ゝ
帰らんと。却てこの魔ふ屈ふ。ゝ。ゝ。その賊ふ固く辞めゝ。然いふ。ゝ。ゝ。
者のうち。両個ふ脱ふ。ゝ。ゝ。別ゝ。その他ふ甲斐ゝ。ゝ。ゝ。
生捕と。保獲ゝ。ゝ。人ふ。ゝ。ゝ。思ふ。ゝ。五七個ゝ。ゝ。生捕。

労かり扶け鎌倉へ送り給さば大慶ならん。と咄して人々を点検て。君がれ為に為るべし
とある。強て多人数送りいせんとの手勢生捕は。吾們定る所なりされば心易く
思せとて。扨て彼生捕と山賊ならちを乗せる都合十二三個こまで副て送へと
遣り下すて当下に朝夷は馬とぞ入農民們に返し。與へて別まくと告ます所と
さら出て鎌倉へ赴とされり。案下某生再説とて彼吉見冠者義邦は食邑なる
武蔵国石戸の荘へ入部なるが石戸なる譲りの古鈹は年来人の住ぬ故に荒
廃して顛き倒れ。檐は荊萱おひ茂りて人住居すべき容にあらず。さるべし
まで鎌倉より。如此その趣を彼処へも御教書の下りしかば所の荘官村長なども
評議して鈹の修理を加ふれども郷士なる。宮小四郎弘義が方を主とする。
定めらるるとぞ且に義邦と安東内にてまづ彼第へ指請まで都しも主人小四郎を
要のことありて近郷へ出向由ありて家にあらず。その渾家斧木嬌男董次秋弘

あるの出納へ善美を竭して饗応す。先年安達景盛ぬし。この地を没収せ
られしより地頭といふもの有らざれば農民們我意に募り我們が下知に背きて
公事をも怠る。迷惑せしに這回君の下向によりて人心大に定まるる在下等に於ても
満足せり。又弘義も謹みて君が入部を歓ぶこそまことに縁会なる親族が疾病
しその為にせまりて止ことを得ず鎌倉へ赴ちて然て此ほどのいたはり病人の癒りぬらん
今に於て沙汰もあらず然は也近きに帰郷して拝謁も聊らふべけれまづ緩と
休息あり。且は鈹の修理の事物の要事へ心をもつけて在下君の命を受て文
に携り右も左も計らひ申さんと恭しく半進従の詞を称へて述けれ
ば。義邦も志の厚きを感じ歓んで。元来土地の安東内は若からず。万のこと和激
するが計らひに任してこそとて酒杯を挙て酌かはす。小四郎が渾家の斧木へ
年四十あまり三ッ四ッになりぬるが心の底はいさ知らず。いと老実なる容に

よく痛りつかまつらすまじく懐妊あるべし。程もなく死は眼前の勢。殆ども難産にて、嬢は再の死に産だろう。ど憂きものを仕付まども常云ふ以来どうも悪敷。

うのうろうとや。吾儀も悪きその折ふ。二人の児さ人産だるがうるみ安くして所の親

ゆるこんあくざり。見ものと吾祥のまべ今ふ産の気つ死のうで郎てのみと吾

倚ふ任。少も心おきのふうとこと老家ふらひ乃まべ笹嬢に子笑みて不測の

ふこの家来り。住居と修理をる中ごふも心配ものとかみ行ふふ況てでのれ配

ふあまべ言うごく今ふもあまと産の気つべ伺ふせん。数代の家隷江三二ゞ

渾家浅良井とうろ。見ものとこと言ふて。依実ある老ふ申るれど今ん

故あり。紙の豆岩井とう所ふあり。吾们の楽ふ落居あべ。私ふ二心者ん

こふ近へ人答のまども。まゞ昨日今日そまも達ゞ。初産のうあて伺せん所

も死ふ学ん。強食やう孔ん来しふ不りのゝ。雄士あてそまものこと知るめ者

のゝふ付まべ夫だうとこと楽べ。産まるとおん死が孔ん生でふ痛りうゝ。

さゝ。前へんうるるまでふ厚くえべうるり。おん死ゞ女児とゆ名さとゞ祭ふ性むと

ありうまべ。斧木いろく点ゞて作まべ。ふ及でん。かるゝ時ふ由縁ある人今ら人

ども世ふある程の人性ふ無がとと。況て良人ある小四郎ふ今こと民るふ陽りて

郷士とう人妻性もるゝ老ふ斉ら容るまゞ祖父ふ賀茂殿のまるふ冠

者義公ゞ二男ふ代ゝ。然まべ吉見の冠者殿ふ従来門根連衣ふて強会

殿のふ人号えて他ふ異ある條のまゞ。賀茂次郎義綱ふ。弟義光ふ。

て寛の罪と死ふ以き受甲賀山ふそその氏族ふ対処ゞ。ひつゝ。

彼一族ふ。ふ干隔労漢子とうて。依ふ。この地ふ引籠り。朝田昌ふ

脱ふ三代と送うふ。ゝ小四郎ふ運拙るくて。強会殿ふ日本ふ

とうりふ人威勢宇宙ふ行とゞ。その氏族ふて彩のゝ。寒郷ふ

常に慚悔やむ。まことや何しか注方なく。用て紛らす。董次秋ムこの性を
あらあらそのの素性とりて人並に做さんと考人祝ム吾婿ものとと念ずるうち。
他のまへ行くぬうとひさてもも笑ひ迄ものの不同諸弄のこあの更に
用のかるる縁もある吾ム。いとで沐男者ふるすどころ心と動く伝のまもまと果化まず
分付のようといと懇る會釈に従来走朴の處女のまとそのの志と感じ。
あれ者ふ宵ひろ。右左して両三日過ろ宵のとるるるるる暴に腹の痛むこ匡
媛い横ひき被ぎ。悩める容に冠老と治め。三獣六摽吉等。りこ産の乳の
薬しやとこ。嘆ぐとりて、父斧木い来り。媛ど腹ふど素りつ人つ。迫い催しる疑ひ
ふ。媛のとく来ませーよろ。夫と推ちて隠婆さ嫁て特とあるるる彼と
呼んとふ奴ふ分付。走らすまを程もるく。老掘来りて腰と抱き。草つの辺ろ。
小腹へ摩り下るふ。媛い頻りふ問ぐ。その夜二更ろ頃。安とと産蕩ちふ。ろ

男児ふて産声ふいと空ふ揚るまど。斧木いとと懐きころ。ようと言ふ
伝ろう。刀称ふも然こそこき。考ると冠老いと且つ人て心中の歓び大ことのくろう
け。媛とび備し弄ふふ居へ唯備ふるる血の茉且湯漬ふど進むふ砂糖む
所ものくて。ぜこふど清こーふ人ふ人ても大ふ安婦の名ひとる。ようと二上
日ことれどふ。父斧木ど且夕所ものに去らど。いと伝実ふいるすのろ。ぜど河原の
ぶけまびふつけて伝とる。心全のふあーど。江の三三ものと且等放柔。
迎ものに近ひふ来る成るまび一日ものに早く就ふ赴。浅良井と羽て来らんと弱
有ふものこのよう。ぜ久ものと獣六郎と靖共ふ急ぎてとと久安る涙ふ冠老と
摽吉のこ。その脇い甲斐ふ。ひ雑人ものて物の要ふいえざるとど。父斧木ど和ま脇
実ふのふ。この家の婢女。且暮ふ心て用ひ孩児のこ媛ど伽いさろ煙
まび。十日見の冠者ものに心い易く。おりふ考てまさあふ。ものて人の歓ぶ

児と産せしよしと古人も既にいひ遣て実にとほに起に叙びあらかめやおはつれども熟とすなば此のことを思ひ回せば苟くも遠祖ハ清和帝の皇胤にして世々武将の家に居り海内に威を輝せしも栄枯得喪の慣ひにて一旦平氏の世となりて実なき消残る五更の燈火なるかなと不滑にしもまた時至りて源家の栄え鎌倉殿ハ古来になき総追捕使の職さへ賜りて時めかるるとは併ながら雄功ぞ吾父なる範頼朝臣と義経朝臣が功績によりて。然るを讒者の舌頭に義経朝臣ハ頓滅び続きて父も寃をいれて伊豆の国修禅寺にて終に生害なれたり。吾當時ハ稚なくて物の善悪も辨へねど忠義無二なる家臣等に冊かれて人となりて。昔語を聞にすら腸を断思ひあり然とも往方なくさらに人の孝養身ハ一巫の主となりぬ。縦し家名を興さんと思ふの外に願念あらねど猶おもひなる人微運にて志を得も遂ざるかる寒郷の主となりて生涯を送らんハ後代までの耻にあらずや。されバ世を捨人の数に入りしぞ勝るらん。然ハ諸ておもふ心の底に何ぞ得べきとおもひしが。今愁ひの孩児を産しよしハ絆となりて其の志願ぞ頓ふ挫れ怯へきまで依怙なりて。世にある人の産したる家子ハ殊さら定めて三夜五夜の儀式あり。式ハまた蟇目胞刀の式七夜とらへ一門ハいふも更なり祗侯の面々車馬門前に市をなして夫々の進物など堆高きまで積累れ亦誹とぞ見えて祝し現に目出度こととなるべき。今寒郷の士となりては誹訪らふ人もあらず。一個両個の従者とても数路へ遣りては淋しき寓居なれば児の字を号るのみと七夜の儀とする事も果敢なきはと秋波と思ふにも無端と限りなく嘆きて暮しけり

續輯第十二

同気相索む奸汁の密話
理を説狩と止む婦人の實

斯て爰なる家の主宮小四郎弘義が。この比家に在ざるとらへるる仔細を審ぬ

ときに去ぬる年安達景盛が地を没収せられしとき。荒次郎義秀の嘆願さ
は故ありて。その荘園を賜りしかど。年来北條家へ出入して湯島時政父子の
家臣にも親しけれバ。彼に媚び賄賂を贈りて憑みけれど。不満北條の心にも
任せねバ。折もあらバとその後沙汰もあらざりしに。義秀もいさゝか片時も忘れず
然ハあらず年甫暑寒ハ更なり鎌倉に往ひて肩をならべねども董次
秋弘もまた年十分にあり。侍り今ぞとて件の荘園を吹挙して賜りしに。帰りてその望
年董次ハ十九にあり。後にて馬さへ違ひて遠祖よりの由緒とて石戸の荘とて
ぬるし既に再三再四に及べバ。時政今ハ不便におもひて一時廣元善信等にいひてよく
評議しけるが。義秀ハその罪にあらずといへど故判官為義公の御
敵となりし筋ありけれバ。その枝葉なりとも奉る功績のあらざるに荘園を宛ら
まんハ近曽依怙の沙汰に似たりとて。その儀ハ立て止みぬ。そのハ不理なれバ。

時政も強ていはず。その儀に止ミぬ。然るに遠田吉見の狩者に譲りしかバ。さてこそと
年来の望を失ひ将命下りしかバ是を返ひもし。いかにもせんとこの年来
折にも鎌倉に往ひて北條殿の君臣に親しく睦みつ分限に応せざる苞苴を
贈りしハ是故の故ぞ。吾此とても董次とて世にあらせんと思へバこそのことと
思ふ縁て望める石戸の荘今義邦に賜ひては年来の永劫の依願の成就ましきこそ
ならずして詮なき所為の似たれども措べきことにあらねバ。自ら鎌倉へ立越て北
條殿に歎かんと両三個の従者を将て鎌倉に赴きて。雪の下に旅宿して北條
家に祇侯りつ事を以て執権へ面謁を請けれバ。時政ハ遂に病と称て石戸の
荘を義邦に賜りしを怨まんとて来れりものなりとて思ひあたれバ。斯ての心中の
様もたれぬ。その故に一日閑暇の時を得てまた宮小四郎が
旅寓に訪ひ到る。小四郎弘義欣びて取るものもとり敢ず急ぎて鎌倉へ参りけ

まづ執次の者さし出て先づ案内し、広間に誘ひ且くこゝに控へ給へかしと云て執
次の雄士は出て執権と主人罷り出て対面とあるべけれど此ほど労りて床にあり
起居も心に任せず。と元来他の客ならず、平生に居る一室にて面会せまく存
ずとの儀。海恕あらんは大慶なりと申したり。小四郎は殊に心中に歓び
吾も左様に思へば心隔てず常に居る一室まで逢んとあるは原より願ふ処。倖
なりと。数田額著て老体といひ所労あるを押て召されし故に辱く存じ奉る。行末
ぐにまかせて頓て紫門を潜りしにその丁寧なる法に遵て頻りに两の袖を執次
雄士は瞬きもせず援けて大に会釈しぞ此方案内すると座敷ならば案内せり。偖彼
処と指して是ぞ主人の居間なる。頓て進むと見えしが小四郎は膝を縮め早く佩
刀を抜きてそこなる障子の傍におきて大に席の外に至りて其所に坐し
時政は上座に褥を敷てありしが夫と見るより下りて外さんとするを

挙て相公所労と兼ひる。その様快く坐しぬ。外しあれど在下が心中還て心苦し。
とありしを咲て時政は荒示と笑て他ならぬ和殿と吾は親しき中の許あるの
ち坐せば小四郎は猶悚く致ひ寒暖を伸べ所労を問ひ然して後いひ出すは徒
然にても願ひつる石戸の荘の一件も這回吉見殿に傷ありて五百と父子が情動の
画策とありしも詳ならねば今更に詮方なけれど偏に相公の仰にも頼みの是
を計らひ給ひ。但吾執権の職に在る程は何にも計らひてん心易くおもひ給へと銀に
宜く申されしや半ば傷つけし心地せしまで歓びし。其ほどに遂ぬ這回の結構は数
書を以て勝さへもあらで済ぬ事なりと然れども執権相公定めて深き思慮
も在さん。静にしまて侍ふ如くに二回は操ぎて胸を痛めて止みしが旁は
歎きもこゝろに忍びぞ然らば孫会して更に相公に拝謁し、心の底を露はさん。
と侍らで遠く来りて以て今後とも計らひ給はるやらんその條を

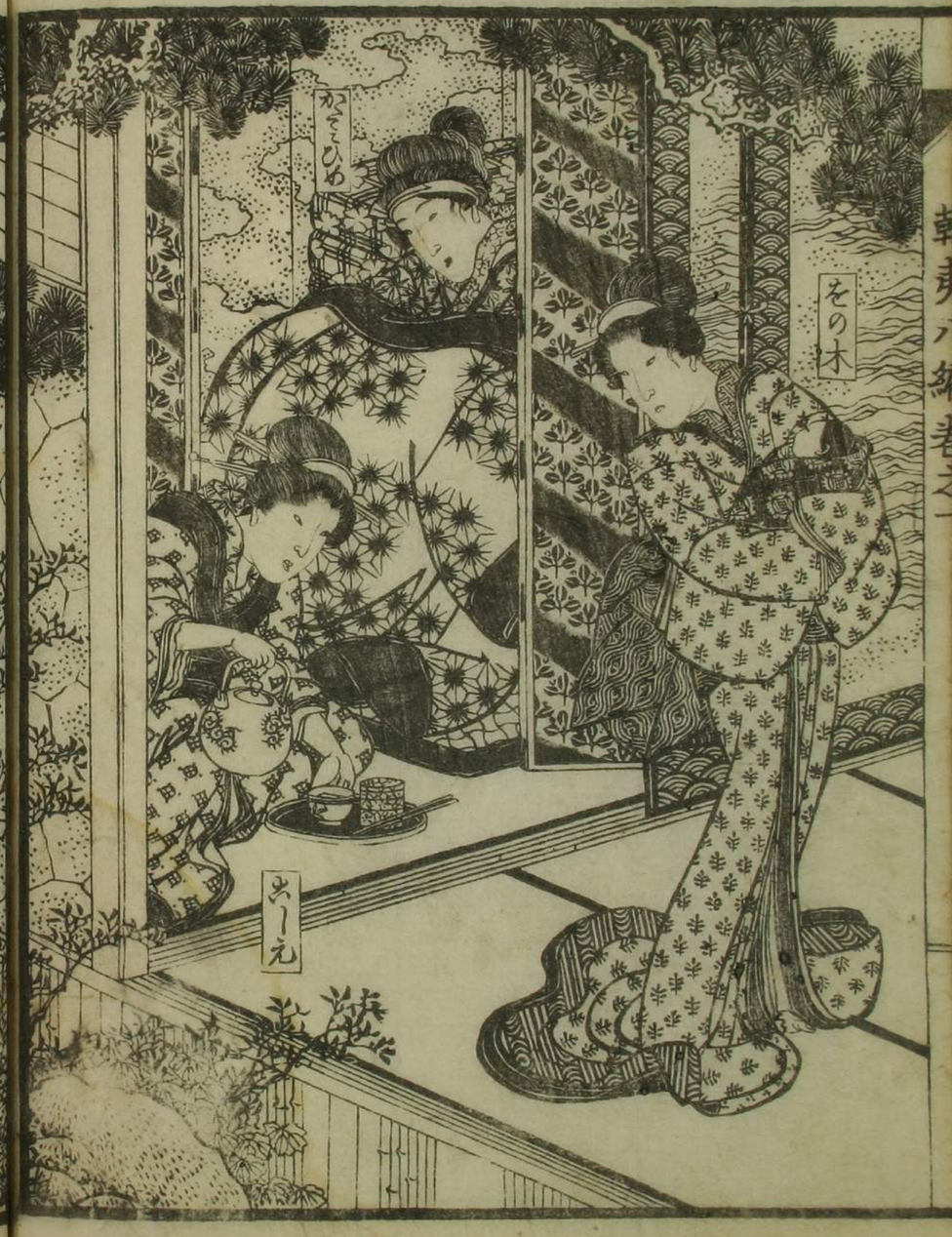
承りて老耄の楽みをさまくも欲まるり。初まりうさべすれども。死しして
賞のこと。貧ゞく島滸の白徒と相公の怒りを解るべようべるに死ぬべ
生えあげらめく賀斉殿の校考を全く由縁のるれをもあるず。唯をとりて愿
ふまでなり。相公宜しく愛憐ありて荘園は石戸を限らずもや秋吹の山中の
とも。元弘の目べ弘義が老後の眉目と欲するり。し惨然として政
熟と施政り。和殿が述懐理あり。故あの地はわりとして吹拳るさんとそのとと。
既に再三に及びしうど。故右幕府のあんちより荘園のことをつれて法士一統に評
議して各異なるれをもれば。揚つるぬ定ありて五日まで自由云弱く雖義なく
吉見に元弘なあ。ろれども吉見の冠者は波弱者の義秀と骨肉のれく紀
ろくて後ろにゞ家に禍ひせんのの渠にあり。周て遠田も陸奥も比法の挙動を
はと責め。放し内人のやくう。方寸の地ぞ共へと。ひしが尼御基。その服の決

しられ渠と貞に貞て既にあくこまでべ。開と妨ぐべきこをもるこ。まづ手を出に仕こう。
あれ渠が必ず不祥あるべ忽地に変改せんと。開は五日方すの程にあり。と吉沢低
めをひけるべ小四郎弘義肚裡に大ゞと執権が心を推。膝を進め四をとりまり。
いろにも彼人縁でよう。父の寛に陪ぞしい当家の不為と恨める由あり。実に相公が先
けん。毫釐の差ひあるず。ゞ家と充のの孔の基なるべけと。然れと渠ぞ分
際あて任に朝夷義秀が家を竭して荷擔すとも。伯条のとあるべき。倘まと怪
しと思ふ。とあるべ遠に注進のまくすべ。相公ぞあん香に大馬の労とをとも。
在下いさら愛をせ。心易くなさるよ。と遁従する新らち戌り。時政に頼に笑くに成
食こそ和殿が好に今に拒ず。五日のの義なり。平生にまをもして展れう。
で恨むらに和殿の心中。実にゞ家に倩らるも。否のことを知るべくず。いろ心と
倚とを。様密と若べきとあれど。駙も舌に及ざる。聖の金にあり比べ慢に

舌と動う雅し。と凛ゞ心と励ませい。小四郎は申す敢だ。つゝみ数年言ゞ絃へ。
入ゞ外様も。沢ち物と宣ひ。ゞ在下ゞ心地何ふと新ひゝ
聊理ゞ在下荀ゞ両刀と帯び手ゝ云を食て人と騙作ること
拙ち。ゞ開ゞ相公ゞ切ゞ人ゞ新息。
恨め乱ゞ面特と時政ゞ声と低ゞ太ゞ怨ゞ新ひゝ足
下ゞ心の帯と固めゞ赤心ゞ命ゞ此方へ。
膝と進め耳突出。同行ゞ久ゞ小四郎は退出。かゝてゞ音ゞ
強金ゞ起ゞ。第二月日ゞ巳ゞ郎ゞ百戸の波ゞ著ゞ篭媛は一昨日の甲夜
男児ゞ生ゞ忘ゞ冠者ゞ有ゞ申ゞ。在下は宮小四郎ゞ義
回ゞ常ゞ領せゞ近ゞ入部ゞ。御教書ゞ新ゞ次ゞ刀ゞ
来依ゞ近ゞ若ゞ族ゞ。病者のゆひゞ今昔ゞ

とゞ頓ゞ吳ゞ辞ゞ波処ゞ病ひゞ訪ゞ慮の
外ゞ方ゞ立ゞ乗ゞ心ゞ帰宅遅引国ゞ
不束ゞ紛董次秋弘ゞ名代ゞ人部ゞ近ゞ失敬の段は宥恕ゞ
清ゞ依滞ゞ荘園ゞ移ゞ強ゞ大慶至極殊ゞ唯今義ゞ奥方ゞ
安ゞ若君生ゞ返ゞ歎び祝ゞ何ゞ迎ゞ恭ゞ述け
ゞ士見ゞ冠者ゞ移ゞ振ゞ過日入部ゞ処
石戸左衛門ゞ舊彼顔敗ゞ修理ゞ加ゞ足下ゞ宅ゞ
在べゞ荘官共ゞ則ゞ董次ゞ斧木ゞ信実
河ゞ移ゞ弾家ゞ篭媛ゞ初春ゞ信者ゞ
ゞ冠者ゞ緯ゞ見ゞ簪斧木ゞ老実ゞ痛ゞ扶け
男児ゞ春ゞ都ゞ足下ゞ賜ゞ辱ゞ述け小四郎は猶

弘義が
家小笹
嬢翠麿
を産む
よう邦
ひろよし


かるこひめ
その木
よしゑ

種々と詞に花と飾らせ。追従する渾家と娵且従者等に分付て珍味佳殽を調理させ。客人のまへに持出て。這は麁抹なりものなれども。都て這田の佳儀と観す。在下が寸志なり快く一獻を酌せ給へ。大慶ならん。この邊は海に遠く魚肉は殊さら擇底にて。千寿川の鯉とのミ所の者は賞翫すなり。梅田の牛蒡岩掘葱は名物なれど程近からねば。折ふしまでは芝浦雑喉の来るをまちへども。是等は著人の便路によらねば。佶りして定めずて。又冬春は浅草海苔の渉にも澤山なれのミ他ぞに品類なし。と僅に誇るのミにて人然いはれ。今よりとの所に居鋪と卜なしなば自人煙篤く這方の為人も陸来べくて。ま人傑の居る処は一年にして邑を做し。三年にして都となるとまうし候へば。人が新くても繁華の地となりなん。君は鎌倉殿の連枝とて。いまぞ大荘の五十箇所も百箇所も持なへ。他に在るも。何の不祥は是非もなし。今より後は稍々に繁栄なりなんと待に甚てなるがおしし。庵ま

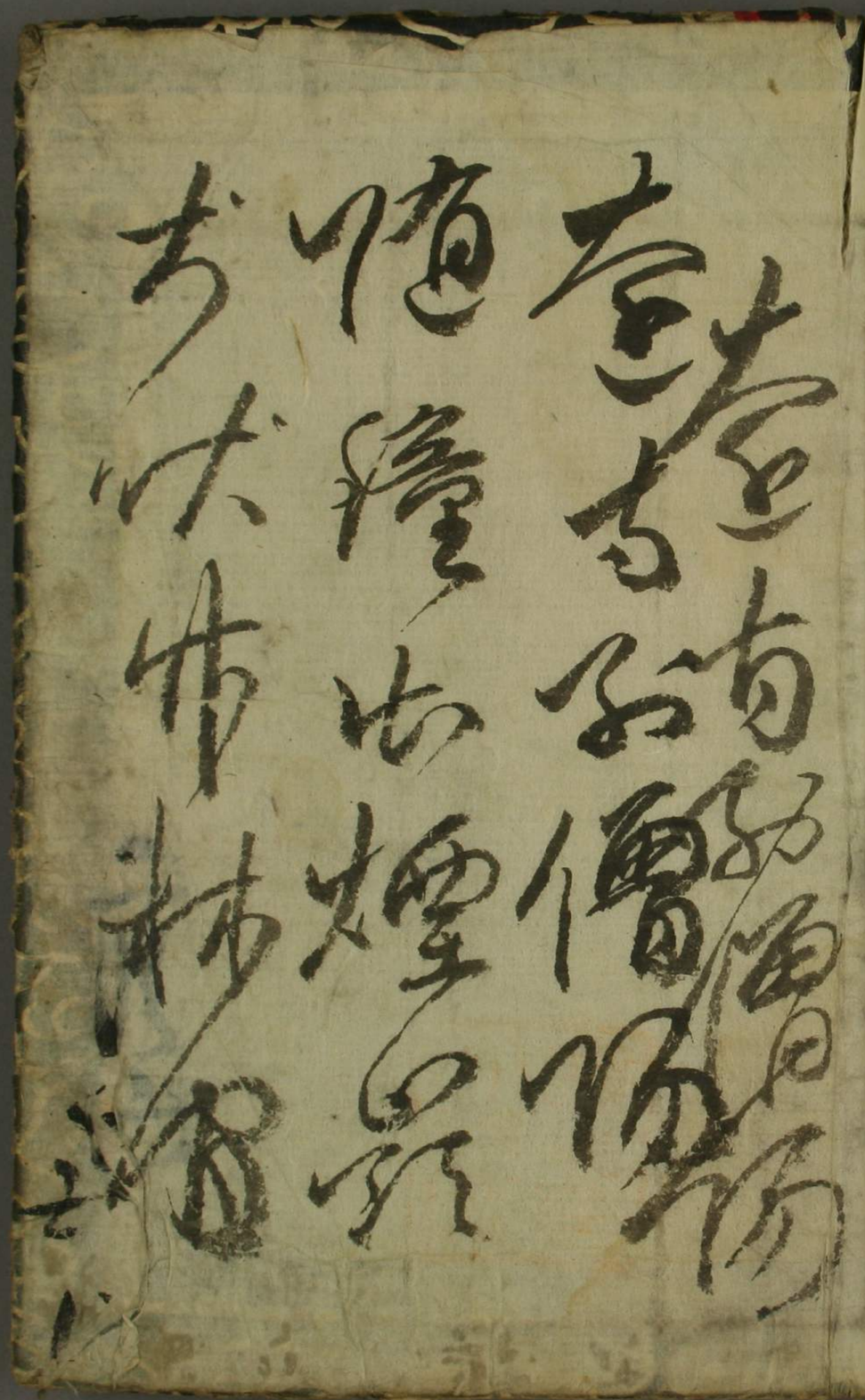
でに誇とせば。吉見の冠者は頬を赧らし。小四郎ぬしは大に遑ろう。在下も兼ての疎徒なれん。近曾諫言に逼しそ飲だざる面持に。芳木は倩ならり口を開き者よこのごろ深く心を姿が良人は義は世におふ忠速なりき思に心に畏れ玉さるなく已が善ともとは限りもなく賞咬し。却て人に恐ろしめにもありてしいとあるべし。さまとまで一点たりも佞奸なく。在の侭なる性にて侍り。今より后は何にまれ食刀称の指揮をえて。そをに従ばよとするがと阿り縮らん白徒と忍ざれ亻の心の為宛なり。穿くさまる鳥嶺人すらず。然あれせよしても笑ふ冠者も亻大乃て心裡に五百箇々の艱難辛苦と做しる心のあるなれ。思慮足ずして小四郎が詞を聞に怒りわするひし紀なりとかひてとり。かくて酒宴も酣なり。主客わるしく。酩酊すそ四方八方の物語。且は各々座の上の盃沉なといひ笑て其興まかで尽ぬ。うた小四郎冠者なうち對ひ箇にまぎらし。いはく君は藤殿の

曹司の宮殿上の人たちの中に三夜五夜七夜の儀式所のわくに為しめ実に源
家の嫡流と申そうどころ九景勢に在下その折在孫食ゐて原ゐるべく世の
中と憤ろ斗り美しく宮ひくの日ひけ。夫より緯の出来て後へ孫ふさ今ろ孫
ひそ遠古をみる玲瓏のひ時そうてこの荘の地形ゐるうゐど昨日今日まで長
閑えいまぐ全く個いだとこの若君の誕生の今。あるこもいと寂やゐて祝しまう
すの吾们のこ此若君も成長のその後い一方の大将とゐうのゐ此ゐ。然ゐとぐそれ郷の
儀とゐて後来の繁栄と祝しのひそ然べとこの久かる遠部ゐそ強ゐ人栽ゐこ
けまべ或ひいこと懸流猛馬ゐど別ゐ人べ今因ゐまゐず。さまこど近日狩会と催
さまて若君の誕生の儀と寿ぐべ。刈卒い荘園の農民们と近傍れすその
序ゐ今度地頭吉見刀祢入郎と祝し若君の誕生と寿ぐゐ狩会と申ゐ。
解ゐこゐ農民们ゐの吉猟と作ぐべ。ゐめゐのゐとゐりまべ冬ゐ雪時

沉吟ゐ。并ハ一段のゐゐ。見下ゲ好ゐさゐこゐぐ。今入郎その間ゐまゐべ。狩
会と催さんゐ人を如何ゐゐんん。此郷ゐゐべ何だゐの寿ぎゐゐ。こゐと
董次ゲ傷より武士ハ狩会漁猟と全く庇の保表とせず。弓馬と武を水炎とゐこ
の為ゐて武用と世ゐ。さまべ入郎の折ゐゐこと徹しゐて武威と弦民ゐ示すゐ豆
べ。在下若年ゐゐとゐ人ども父の物語ゐ兼ゐまべ家系全く異ゐゐゐず形くも
一世の程ゐ。家名と揚ゐん。と存ずゐとゐて折ゐ。狩漁とゐゐとゐ人ども数ゐくゐゐハ
威勢ゐくゐ。僅四五個の列卒と備ひ山野と表ゐる故鹿一頭とゐ獲ゐ。ゐ限り
ゐゐくゐ獲物ゐこゐ。その心と慰ゐひ。然ゐまども馬ゐ乗て遠所巌石と馳ゐこゐ。怒
らく人ゐ負ゐとゐりゐ。形ゐきハ一郷の人ゐとゐて列卒とゐ。山野隈ゐく狩ゐこゐ。
ゐゐ興ゐてゐゐゐ刀祢除く思慮しゐハ。不日ゐ催しゐ会と切ゐ勧めて止ざゐこゐ。
三三廣光ゐどゐ商殖ゐさハ遇ゐひと。渠ハ生憎越ハゐさて敢ゐゐハ程遠し

如何ぞやもと同答さへ果敢さるくいるさで弐董次い頻りぶこまと勧めまさ
小四郎もこと是笛の小事いさう沉吟ぶ及ぶべきとるのるびぶいへ体福するやくこえけ
まび義邦元来暾湯そ。その気象ぶ烈しくずぶ木ぶもあまと竹ぶもあれ人の羽と
濫ぶ。論へぬ性まありけまび。然ととそまぶ然ひぬ董次秋弘大ぶ歎び父弘義の案
書と得て一郷へ觸ろくし。且明日とも定めて。ちち夫と指めその用具とそれくぶ湘
ふる。狩衣の今さくさ乗ぶくべきとぶあくわび摽吉郎ぶ。そのようと浩らひて福
あるび狩衣裳事旦らあい芥木ぶ憑と近郷ぶ人と弛て。その准備頻りこさく
ぶ芦媛い産所ぶありてこのまと歯ぶて。式夜後ぶ人今ぶ。狩者ぶ射弘義と
低ちこの日人のいへときけば。この産まこ和ぶの為ぶ狩余して寿ぐこと。遠ま
試くくれども。脱ぶ刀私ぶも狩衣裳と整ぶび偽るくし思ふぶるるに心ぞ。
今更ぶ辞ぶらくさまくどまん伝まども。成ぶこの児と胎孕くさ。陸奥の鎮

ぶ罹り。刀称い擒ぶと修羅五郎経任ぶ牢獄ぶ在り。妾い渠ぶ側室くせ人倘
辞むこの獄ぶ在る。吉日人の狩者と戮さんと挑むと再三再四妾熟思ふて。
操と破りて良人と助び孝貞の乃いろぶ仇まと苟も妾ぶ父ぶ九郎判官義経
と人ぶも為くまと。将の嬢ぶ。強盗の側室とるくこ。七ッの世とび換くこの辱い雪ぐがと
くぶいくてまぶ従いぶい忽地良人の命と取らまん。ぶ世間と夜の眼も合び難き
成くてかくるけいぶ。神助仏力のこと。一心不乱ぶその昔父判官の念じぶ。山城勢る
の毘沙門天近くに安ぶ鷹澤明神。まこ月来祈念する。圓通寺の観音菩薩地伏
拝くて冥助とこくぶ。その責漸く緩りて。この柵の西南る。斬港のるこぶあつれ日毎
十頭の衣と流へと羅頭い茅悒とも且く安こ心地まる。夫こる月の明日こぶ来小舟
と以て舟ぶ換へかの斬港と潜り出て。進退脱ぶ若まくて。終ぶ死ぬべくるいと
彼方の岸ぶ渡む武士鈎と出くて盗と倚せ。この辺も孤く救まこい別人るくぬ

義秀ぬしかくて賊徒と屠り竭ぬ。力称ひ全きことわひ。ひ。茂下妾死すら
らべ。この孩児も俱ふ死て。伊方の土とうるべきと。圓通大士の功力ふ関て不測ふ
助ろつ月来少しの障ろ。人並ふ産蔵せ。い偏ふ仏祐の加護ふ仍らんさまこと
とのぬふ岩り。お貝人と恤と生類と救ひ。汎て報恩とるすべきと。然るたのこ寿ど
ふ。特会として玄くの獣の命とうくんと倦ーめ。い君ゴ日来ふ加合ーくうん。さの
議ハ曲てどうん止ろ。の人うくそ弥めらる。理ふまび義邦ふ赦ふ回差とうさ。
倩て振ふひろり

唯是偏願